特別支援教育の扉 №２８　　令和４年１２月２日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「周囲の理解が大切」

保護者から「小学１年の我が子に首を振るチック症状が見られるようになり、それを周りの友達に指摘されてしまい、登校しぶりが見られるようになったので、どのように対応したらよいでしょうか」と相談を受けました。最近、学校で大きな行事が続き、それが本人の負担となり、チック症状として表れたようです。

高学年以上になると相手の視点（思いやり）をもてるようになり、暗黙の受容ができるといわれています。しかし、低学年は悪気はないが見たことをそのまま言葉に出すので、相手を傷付けてしまうことがあります。そこで、次のような内容を手紙にして学校に伝え、担任から学級の子どもたちに説明してもらうことを提案しました。

１　チックは、緊張する場面で多く見られ、自分の意志では止めることができず不随意的に生じる運動や発声であること。
２　一過性のチックは、自然に治る場合が多いので、症状を見ても指摘したり、無理にやめさせたりしないで「優しい知らんぷり」をして温かく見守ってほしいこと。

担任は学級の実情に合わせて、手紙の内容に修正を加えて説明しました。学級には、チック症状のある対象児の他に、離席する児童、奇声を発する児童等、気になる児童が在籍していることを踏まえて、誰にでもできないことや苦手なことがあります。だから困ることもあります。一人一人顔や名前が違うように、困ることも違います。もし困っているときは、一人で悩まないで「助けて」と教えてください。先生は一人一人の困っていることに合った応援をしますと伝えました。その上で、対象児は緊張しながらも精一杯頑張っているので、これまでと同じように関わることを具体的な姿に即して説明しました。

周囲の子どもたちが、学習面や行動面で気になる子どもへの支援に不公平感をもたないようにするために、一人一人がかけがいのない存在であることを実感できるように、「いつもあなたの頑張りを見ているよ」というメッセージを送り続けることが大切です。また、支援対象児への教師の見方や関わり方が周りの子どもに影響するので、適切な関わり方の実際を示して「特別な支援」から「当たり前の支援」になるように、多様性を認め合える学級づくりを心掛けましょう。

その後、相談を受けた子どもは、家族が「ゆっくり、ゆったり、のんびり」関わったこと、学級の子どもたちの理解が得られたこと、学校と保護者が連携して早く対応したことから、まだチック症状はあるものの元気に登校しています。

とれたて直送便

「寒い冬を熱い冬に！」

自校の特別支援教育の課題に関するテーマの他に、発達障害や愛着障害への理解と支援、保護者への支援、子どもの自己肯定感を高める支援、特別支援教育の動向、ユニバーサルデザインの授業づくりなど、各校の実情に合わせた話題提供をします。ぜひ寒い冬に熱い研修会を計画しませんか。